

## 大阪府支援教育研究会 創立60周年記念研究大会

2012年8月8日 大阪国際交流センター

**分科会 まとめ・報告****第1分科会 高等学校におけるともに学び、ともに育つ教育の実践**

澁谷花菜子氏 (大阪府立西成高等学校)

大原有則氏 (大阪府立枚岡樟風高等学校)

中川泰輔氏 (大阪府立松原高等学校)



澁谷花菜子氏からは、西成高等学校での障がいのある生徒について次のようなお話をいただきました。2006年度からは知的障がい自立支援コースが設置されているが、創立以来ほぼ毎年障がいのある生徒が入学しているため、クラス担任を中心とした全教職員で関わる体制がある。情報交換の会議を緊密に行うことによって、情報を共有している。毎年4月末頃に、なかま紹介ホームルームを行い、障がいのある生徒の自己紹介を冊子にして配布し、高校に通う全ての生徒

が、障がいのある生徒について知る取り組みも行っている。

大原有則氏からは、共生推進教室の紹介や自立支援コースとの違いなどのお話をいただきました。共生推進教室では、クラスやクラブ・たまがわ高等支援学校等での仲間作りを大切にしている。周りの生徒と共同作業をする場を設定したり、一番の理解者を発見し、そこからの広がりなどを支援している。卒業後の就労を目指しているので挨拶や言葉遣いに気を付けさせることや、職場実習やクラブ・発表の機会を多く経験することにより、本人が成長することが多いという話もいただきました。

中川泰輔氏からは、昨年度に担任をしたAさんに対しての支援の体験を基にお話をいただきました。年度当初Aさんは、「集団の中にいることが苦痛・何故だか学校に行きたくない」と訴えていた。課題は自己肯定感・人間関係の弱さであった。学校では担任を中心に色々な人が情報を共有しながら支援した。産業カウンセラーとも連携して支援した。そのような取り組みを通じて、自己肯定感や自己認知が高まり、「学校に来られる・学校行事に参加する」ことができるようになった。

3名の先生方の話で共通していたことは、色々な人が共通認識をもって支援をされていること・一人ひとりのニーズに合わせた教育を実践されていたことでした。参加者からは、入試や実際の生活についてなどの質問ができました。

**第2分科会 関係機関との連携 実践報告 他機関と連携して自閉症スペクトラム障がいのある子どもたちの支援にあたった実践について**

大澤佳世子氏 (大阪自閉症支援センター)

佐藤美恵氏 (高槻市教育委員会 教育指導課)

稲岡美香子氏、山中洋子氏 (高槻市立第九中学校)

支援学級担任として、専門的な知識の足りなさや効果的な指導技術について悩むことがよくあります。特に初めて支援学級を担当した場合には、それが顕著にあらわれることがあります。

今回の実践報告では、自閉的傾向のある生徒への対応に外部の専門機関との連携を行いながら取り組み、専門的な知識のある教員の育成に取り組んでこられたペアサポート事業についてお話して頂きました。

教師は、とすれば自分たちだけで解決しようとしがちですが、今回の報告では、外部の専門機関との連携、市内の教員のアドバイスを活かせる制度（リーディングチーム）など、色々な工夫がありました。また、市教委として障がい児教育を担う教員の養成に計画的に取り組まれており、この事業対象の学校を選ぶ場合には、支援学級担任だけでなく学校としての体制も重視されていることや、対象教員は事前書類や経過書類を書くことにより、児童生徒を見る視点や実態把握が確実になることを話されていました。



専門的な知識の獲得、記録の重視、子どもへの寄り添い感等、支援教育に関わる者としての基本が大事にされていることがうかがわれました。

また、今回対象となった生徒の小学校時代の先生も会場におられ、成長した二人のステキな成長を感じましたとの感想を持っておられました。

報告のあといくつかの質問がありました。自閉症の子供が廊下を走ることの理由として、後ろを見ながら走っているというお答えがありましたが、全ての行動には理由があります。報告の中でもふれられましたが、冰山モデルで示しますと、外から見える行動に対処することばかりではなく、外から見えにくい「個々の自閉症の特性」を理解し、「なぜそのような行動が起きるのか」という視点から対応し支援をすると、子どもが自然に変わっていくのではないのでしょうか、とのお答えをいただきました。また、校内での研究体制についても質問があり、支援学級担任だけでなく、通常学級担任も参加する等、全校的な取り組みをされていることが分かりました。

保護者は、子どもの成長をみてられています。障がいだけでなく、その子のいいところ、しんどいところ等、私たち教員よりもよく知っておられます。そんな中で、保護者の信頼を得、子どもたちの成長のための支援を行うためには、正しい知識と子どもたちの将来に向けての見通しをもつ必要があります。今回の実践報告は、そんな私たちに一つの見通しを持たせてくれる取り組みだったと思います。

### 第3分科会 発達障がいのある子ども理解と具体的支援

#### ○発達障がいのある子ども理解と具体的支援

平野真美氏（大阪府立守口支援学校）

発達障がい理解のために、特徴を具体的な例と共に説明していただきました。その上で、「環境づくり」「授業づくり」「学級づくり」の三つの支援のポイントにそって、多くの学校学級の実践を踏まえ紹介していただきました。担任が、その子どもとどう接するかを周りの子どもたちが手本にしながら成長していくことを念頭に置き、子どもをほめて認めて好きになって受け入れることで、すべての子どもを輝かせることができるという言葉が印象的でした。



#### ○発達障がいのある子ども理解と具体的支援 ～障がい理解をベースに「その子」理解を！～

浜崎 仁子氏（和泉市立光明台南小学校）、保護者の方々

障がい理解をベースにした『その子理解』をキーワードに、その子にあった方法を見つけ支援するヒントを保護者の方々のかかわりも含めて紹介していただきました。三人のお母さん方のお話からは、それぞれのご家庭の「その子理解」をもとにした日常の支援のようすと愛情がとてもよく伝わり心が温まりました。保護者の方の情報を元にして、教師が支援教育のプロとして支援の方法をいっしょに考えながらアドバイスしていくことの大切さがとてもよく理解できました。立場や役割をこえた「つながり」が、一人ひとりが豊かになる将来へのキーワードであるという浜崎先生の言葉が印象的でした。

## ○和泉市立富秋中学校の取組み 支援教育の視点からの生徒指導と学習環境作り

原田 尚史氏、玉野 良和氏（和泉市立富秋中学校）

長年「荒れ」を克服するために、さまざまな方法を駆使し努力してきた中学校が、課題を持つ子どものことを「困っている子」という支援教育の視点を持って見つめ直し、関わりを持つことで学校を変えていく取り組みを行っているという報告をしてくださいました。授業のスタイルから学級や校内の環境づくりまで、ユニバーサルデザインの学校づくりを、支援教育部会を中心に組織的に行うことで、効果がでてきているそうです。チェックリストから得た情報をもとに、生徒それぞれにあったアプローチの方法について、近隣の学校や施設と協力して検討していくことで、誰にとっても安心できる学校づくりがこれからも続けられていくことだと思います。

### 第4分科会 「個別の教育支援計画」の作成と活用

林 茂樹氏（大阪府立佐野工科高等学校定時制課程）

藤野洋子氏、丹羽はるか氏（大阪府立交野支援学校）

林氏からは、佐野工科高校定時制課程の入学生の特徴と教育支援計画の作成を通じて、教育的に不利な条件におかれた子どもたちを支えていく力のある学校・インクルーシブな学校にしていこうとする取り組みが進められていること、年1回に終わらせない中高の連携や、多面的に子どもをとらえるために、関係機関との日常的な対話を大事にしていること、卒業後、社会に出て行くことを前提にした自立を目標に「支援計画」を活用しようとしていることが報告されました。



藤野氏・丹羽氏からは、①わかりやすく説明する力をつけよう ②保護者の気づきを促す「事前説明」の工夫 ③ケース会議の工夫という構成で、ワークを交えながら報告が行われました。「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」の作成に個々の教師がウンウン唸りながら追われるのではなく、ケース会議を工夫することで、もっと活用がはかれる「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の作成をめざす取り組みが発表されました。数多くの地域支援巡回相談の経験の中から生み出された実践で、ホワイトボードとデジカメを活用した「アセスメント」「プランニング」の会議の工夫は、すぐに使えるヒントを多く含んでいました。

2本の報告ともに、より具体性、効果のある「支援計画」「指導計画」作成につながるケース会議の進め方について多くの示唆を含んだ内容でした。

### 第5分科会 学校におけるICTの活用

#### 「ICTを活用した10年後の支援教室、支援学校の姿をパネルディスカッションを通して考える」

坂井聡氏（香川大学教育学部）

小川修史氏（兵庫教育大学大学院）

竹島久志氏（仙台高等専門学校）

金森克浩氏（国立特別支援教育総合研究所）



「10年後の支援教育を想像して」をテーマにした研究発表とパネルディスカッションが行われました。

初めに、①ICTを活用した支援の可能性 ②ICTを活用した教員研修 ③今後求められる支援機器の 3つのキーワードが提示されました。

坂井氏は、ICTの活用は新しい能力感の創造（その子の力を最大限に引き出すこと）であり、障がいを克服・改善するのではなく、生活上や学習上の困難さを改善・克服することを再確認するものであり、本人の能力と支援や機器だけに頼るのではなく、周囲の理解を広げていくことがより大切なことであると話されていました。

小川氏は、「ICT機器を使うことが目的にならない」ようにすることが重要であり、そのためには、子どもの気持ちや立場に立って考え、なぜICT機器や支援グッズを使うのかを教員がよく理解することが大切だと説明されていました。また、ICT機器を使う柔軟な考え（トライ and エラー and フィッティング）を持つことが望まれると提案されました。

竹島氏からは、子どもの活動を中心に改造した重度・重複障がい児のための教育活動支援機器・ソフトの紹介がありました。また、特別支援学校と連携し教材や機器の開発に取り組んでいる福祉情報教育ネットワークの情報が紹介されました。

最後のパネルディスカッションでは、10年後は、教員が教育のすべてを担うのではなく、多くのネットワークを広げ、ICT機器が活用されているであろう。そのための教員研修（理論・実践・疑似体験・リフレクション）の繰り返しが大切であると話されました。

休憩時間には、ICT機器を使った教材の展示があり、熱心に体験される先生方の姿がありました。

また、講演後は、講師の先生に質問される先生方が多く見られ有意義な研修となりました。

## 第6分科会 特別支援教育におけるキャリア教育

亀平福一氏（大阪府立堺工科高等学校）

永松裕希氏（信州大学教育学部）



亀平氏から、知的支援学校におけるキャリア教育の実践をお話いただき、知的支援学校における職業教育について次のようにお話しいただきました。

キャリア教育とは、児童・生徒の実態に応じて、労働や就職・就労のみにとらわれず、「自分でやれることを増やしていこうとする態度・意欲」を育成する教育ということも含まれる。職業体験を通して本物と出会い、多様な気づきや発見を得させることも重要なことである。わからない時は質問でき、他者と協力できるということも重要な要素である。私たち指導者自身が常に社会背景の変化に対応していくことが必要である。学校と地域・企業が連携し、小・中学校の段階から自らの力で社会で生きていく力を育てることが大切である。

支援学校での実践と工科高校で実践されていることで、キャリア教育を進める上での具体的に重要な教育内容を話していただきました。

永松氏からは、特別支援教育におけるキャリア教育について次のようにお話しいただきました。

学校で出会った子ども達が幸せに過ごしているかどうか気になる場所である。5年間の卒業生の就業者の追跡調査によると、離職理由トップは職場の人間関係である。人とどう関わっていくかがポイントとなる。卒業後、子どもにとって何が必要か、社会の中でどう生活するのか、個人の仲間集団への社会的スキル訓練が必要である。さらに、職場や社会が障がい者と共に生活するスタイルができていくことが重要である。

質問の一つに、キャリア教育をどう充実させるかというのがありました。日本は、苦手なところで勝負させようとするが、この子にとって豊かな人生とは何か考え、練習ではなく生活を中心として必要としているものをカリキュラムにするという回答をいただきました。